

農用地保全活動や担い手確保に向けた取り組みを行う。商品の販売収入や空き家活用によるオフィス、シェアリングハウスなどの賃貸収入による財源確保を行い、自立・継続できる協議会を目指す。

#スマート農業、#桜まつり、#鮎河菜、#鮎河米、#グリーンツーリズム、#買い物支援、#ドローン

対象地域

(事務局名)
羽ばたけ鮎河自治振興会

(地域の範囲)
小学校区（3集落）

(土地面積（R4.3月時点））
5,460 ha

(農地面積（R4.3月時点））
53 ha

(世帯数（R4.3月時点））
144 戸

構成員

- ・(農)すごいええのう鮎河
- ・鮎河集落協定
- ・鮎河すごいええのう保全隊
- ・(株)あいが
- ・NINJA LINKSS
- ・(株)EUREKA

活動に関連する他の施策

- ・地方創生拠点整備交付金
- ・「デジ活」中山間地域
- ・中山間地域等直接支払交付金
- ・多面的機能支払交付金

取組内容

現状と課題

農用地保全

- 後継者のいない農地が多く存在する。
- 農地・林地の保全管理が十分に継続できない状況が懸念される。

地域資源活用

- 毎年実施していた「桜まつり」が3年間開催できておらず、存続が難しい状態である。
- 伝統野菜の「鮎河菜」や地域ブランド米「鮎河米」などが十分活かせていない。

生活支援

- 高齢者は年々増加しており、独居老人が増えている現状の中で、高齢者への支援・見回りが十分にできていない。

課題に対する対応方針

- (農)すごいええのう鮎河が中心となりスマート農業を推進し、集落内後継者の確保、育成につなげ、守るべき農地・林地の適正な保全管理を行う。

- 「桜まつり」の地域住民の出役方法や恒常的な活動の継続方法について検討する。
- 「鮎河菜」や「鮎河米」をいかした商品開発を行う。
- グリーンツーリズムの検討を実施。

- 地域協議会を中心に高齢者の生きがい対策や買い物支援について検討する。
- ドローンを活用した高齢者見回り支援と合わせた生存確認の手法や地域の見回りについても検討を行う。

目指す方向性(将来ビジョンより)

- 農用地の保全。
- 農事組合法人「すごいええのう鮎河」へ農地の集積を進める。
- カーボンニュートラルにむけた先進的な取り組みの地域として山林管理を行う。

- 伝統野菜「鮎河菜」の増産、お漬物などの加工品の製造に向けた研究。
- 「鮎河」ブランドを確立。
- 近隣地域連携による観光誘致のための活動等を進める。

- 自主自立に向けた、収益化モデルの仕組みづくりとその商品化。
- 地域住民の生きがい対策。
- 高齢者の見守り対策の検討。

『みんなで支えて、みんなでつくる、鮎河の未来(あした)』をキャッチフレーズに、「住み続けたい、住んでみたい、来てみたい」と思える“キラリ”輝く地域を目指し、幅広い世代の方々に参加していただき活動を行っています。



取組の総括

1年目（令和4年度）

- ・みらい部会でのワークショップ等により、非農家や外部人材を含めて地域の課題に取り組む意識を醸成。将来ビジョンの策定を通じ、各種の課題等についても共有できた。

2年目（令和5年度）

- ・昨年の検討を踏まえ、各種実証に着手。来年度の取り組みを共有することができた。
- ・LINEによる連絡体制やブランド化に向けたロゴ作成、情報発信等の取組が前進した。

3年目（令和6年度）

- ・みらい部会を中心に実証事業を企画・実践した。将来に向け持続可能な体制が構築できた取り組みもあり、着実に成果をあげることができた。4年目以降の取り組み継続に向けての指針ができた。

農用地保全

- ・後継者不在農地を地図上で把握・集落内共有し、保全活動の推進を図る。また、農用地保全と併せ、森林の保全活動を進める。
- ⇒農地保全アプリを活用し農地保全に努めた。森林保全活動の手法についても議論した。



- ・ドローンを活用したセンシングによる肥料散布、防除等の実証、農地保全計画の作成。
- ⇒専門業者の指導のもと、肥料散布、防除等の実証を行い、農地保全計画を検討し、スマート農業を推進した。



- ・地域計画作成の際に、全ほ場の地主に今後の農地保全についてのアンケートを実施。将来のほ場地図を作成し、アンケート結果公表。
- ⇒スマート農業や新規オペレーター育成を推進する。（企業との協働も模索）



地域資源活用

- ・グリーンツーリズムや「鮎河さくらまつり」存続のための各種検討。地域特産品を活用した商品開発の推進。
- ⇒さくらまつり開催に向けた関係者調整や、開催した際の商品開発について協議した。



- ・鮎河米を使用した商品開発「お米パックご飯」サンプル作成、空き家活用方法の検討。
- ⇒桜まつりの再開が決定し、復興と維持方法を検討した。パックごはんを桜まつりで配布し、アンケート調査の実施を協議した。



- ・鮎河米の認知度アップのため「真空パック米」のサンプルを作成し、商品化につなげる。空き家活用のイベント企画実施。
- ⇒「道の駅」リニューアル（8月頃）に向けての商品開発。地域交流の場を設定（夏の集い、冬の集い）し、実証事業実施。



生活支援

- ・高齢者世帯に対する買い物支援、ドローンを活用した高齢者の見回り・防犯対策等の検討。
- ⇒ドローンの活用手法について、高齢者世帯の把握と併せた検討ができた。



- ・ドローンを活用した高齢者見回りと併せた防災対策、高齢者生きがい対策等の検討。
- ⇒見守りの実施に向けたドローンの飛行ルートの設定やテスト飛行を行い、実施に向けたマニュアルを作成できた。



- ・防災意識高揚のため、住民参加型の防災フェスを実施。
- ⇒実際の場面で『動ける』ことを目指し、体験型の防災訓練・防災教室を継続的に実施していく体制ができてきた。

モデル事業3年間の、取組内容の紹介

(全体的な観点から)

- ・全7回のワークショップと住民アンケートを経て、将来ビジョンを完成。地域の住民にも周知した。
- ・さくらまつりの恒常的な活動の継続方法について検討を重ね、開催に繋げた。
- ・地域活性化、住民交流等のイベントを実証し、継続可能な体制を構築した。

(農用地保全)

- ・耕作放棄地を作らないための農地の集積推進や作業効率向上に努め、ドローンの導入、新規オペレーターや外部からの作業員の募集等を実施してきた。
- ・地域計画作成および5年後のほ場作付状況のほ場地図の作成を全地主を対象にアンケートを実施し公表した。

(地域資源活用)

【地域内の作物の商品化】

- ・『鮎河米』のブランド化を促進するため、白米の販売に加え、パックご飯や真空パック米の試作をし、市場アンケートを取った。
- ・地域の特産物である「鮎河菜」の収穫量確保と販路の開拓に取り組んだ。
- ・空き家活用で地域おこし協力隊の方と協働し、移住希望者や田舎に訪れたい人との拠点づくりを検討した。
- ・地域資源を発信するために観光PR動画を作成した。
- ・京都芸術大学の学生と連携し、鮎河菜のPRツールを作成した。

(生活支援)

- ・防犯カメラの設置及び啓発看板の設置を行った。また、ドローンによる見守りの実証実験を行い、実施に向けたマニュアルを作成した。
- ・防災のための住民参加型のイベントを実施した。「いざ」とときに誰もがアクションを起こせるように、実際に体験してもらったところ、良い反応だった。
- ・地域内や地域出身者の交流の場として、「夏の集い」・「冬の集い」を計画、実施した。参加者には大変好評であった。

今後の展望

(全体的な観点から)

- ・生活支援や地域資源の活用を兼ねた、地域内の住民及び地域外の方との交流事業を推進する。

(農用地保全)

- ・農地保全のための活用計画の実践及び作業の効率化（スマート農業の推進、オペレーター・作業員の確保等）の具体的な取り組みを継続。
- ・地域計画に基づき、見直しも加えながら、耕作放棄地を作らない農地の集積を推進していく。
- ・企業との協働を検討する。

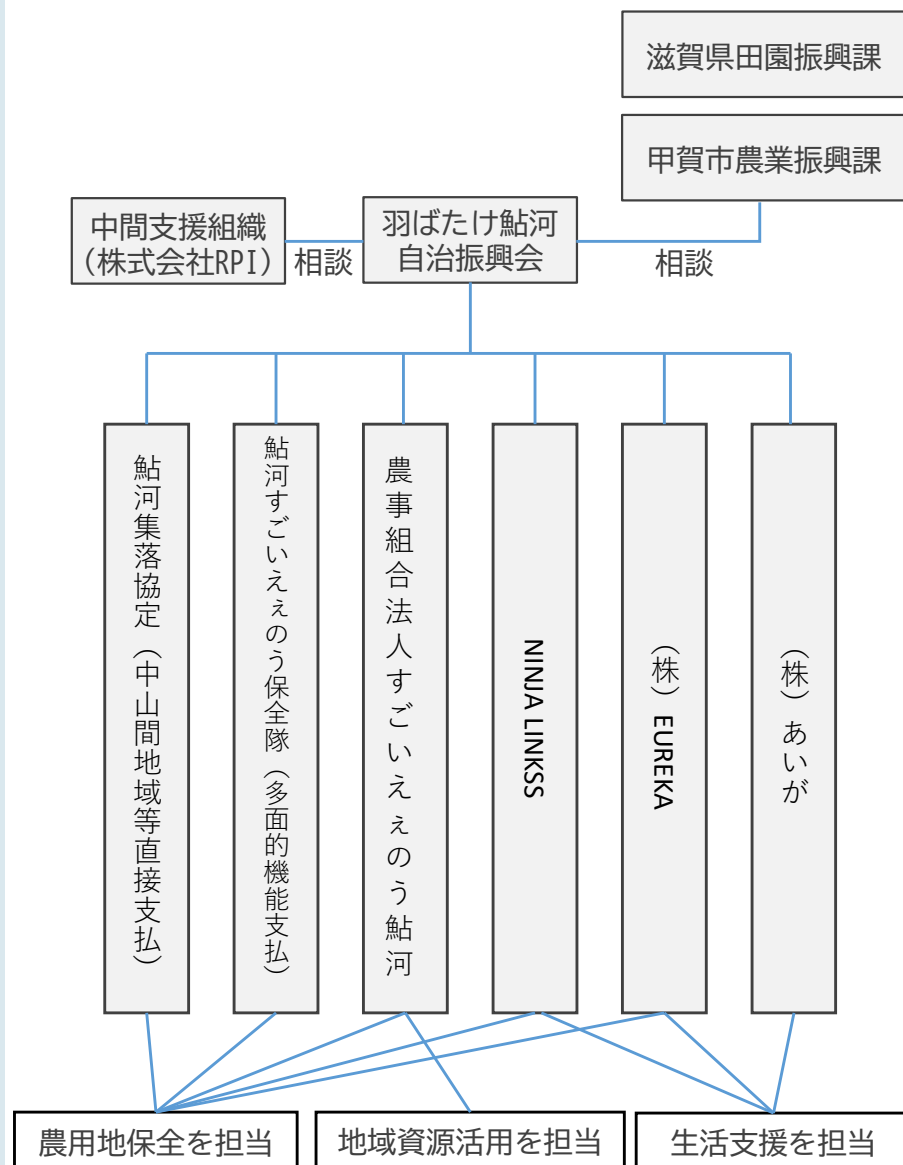
(地域資源活用)

- ・特産品である米や鮎河菜をブランド化し、来夏にリニューアルする道の駅や地域内の宿泊施設、飲食店に協力いただき販路を広げていきたい。
- ・桜、ホタル、清流、紅葉…と四季折々のすばらしい財産の維持管理について、地域内での取り組みと将来を見据えた、地域外の力の活用を検討する。
- ・空き家を活用したイベント等の継続的な実施を推進していく。

(生活支援)

- ・高齢化の進む中、地域内での相互の助け合いや公助のシステムの構築と生活支援（買い物、通院、通学等）の移動手段の確保を検討し、実施に向けて取り組む。
- ・帰省者や地域外からの来訪された方との交流の場（時間）を創出し、関係人口の増加する取り組みを進めていく。

4年目（令和7年）以降の組織体制図



協議会の運営面

(活動資金)

- ・甲賀市から鮎河コミュニティセンターの指定管理を受けることで財源を確保し、地域マネージャーの雇用を行い、活動を継続できるよう検討していく。
- ・特産品である米や鮎河菜をブランド化し、販路の確保し収益化につなげる。
- ・多面的機能支払交付金、中山間地域等直接支払交付金、地方創生交付金等の活用を検討していく。
- ・「羽ばたけ鮎河自治振興会」は、市の自治振興交付金を活用し運営していく。

(活動拠点)

- ・自治振興会で取り組みを進めているためコミュニティセンター内の自治振興会の事務所を活動拠点としている。今後も自治振興会のみらい部会を母体として活動を検討していきたい。
- ・鮎河米のパックライスの配布で「鮎河」の知名度向上と米のおいしさを知ってもらうことができ、今後の「鮎河米」の売上向上にもつながった。
- ・「夏の集い」・「冬の集い」などの地域交流の場をコミュニティセンターや旧小学校舎で実施したことで、地域内交流が盛んになり、特に高齢者の生きがい支援につながった。
- ・空き家活用で地域おこし協力隊の方と協働し、拠点づくりをしていく。また、空き家を活用したイベント等の継続的な実施を推進していく。

(事務局機能)

- ・来年度以降に新たに市の指定管理料により地域マネージャーを雇用し、自主運営組織として運営できるよう体制を整備し、農村RM0モデル形成支援で取り組んだ内容を継続的にやっていく。
- ・行政側に対しては、地域運営にかかる支援を引き続きお願いするとともに、活動の相談や新たな補助金等の提案など、引き続きのサポートをお願いしたい。可能であれば、中間支援組織の株式会社RPIへの相談費用を支援してもらえるとありがたい。